

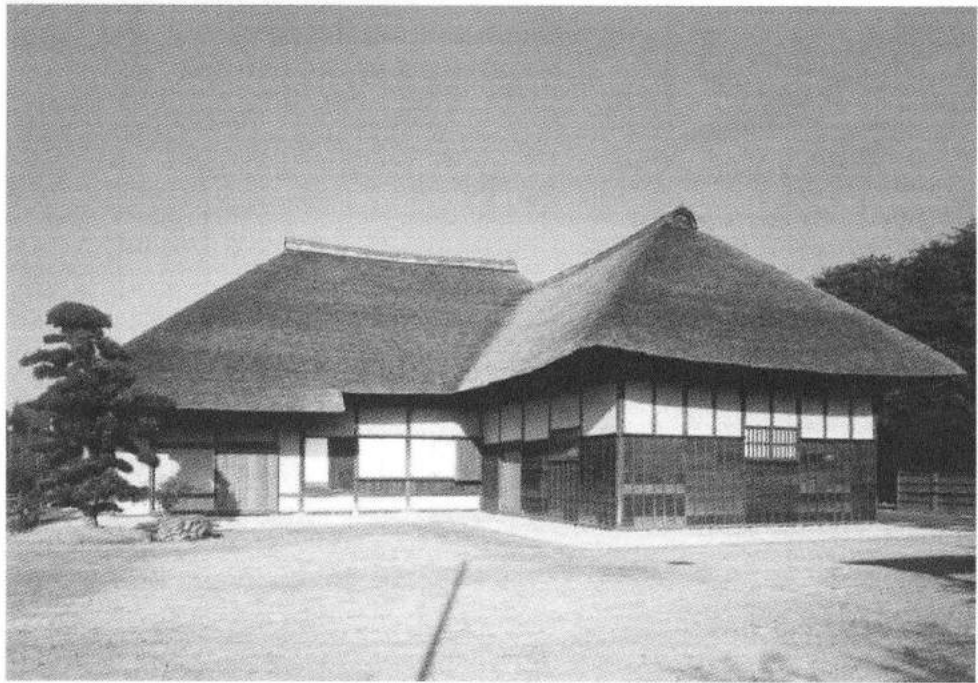


# ときた 旧鵜田家住宅

## 千葉県指定有形文化財

習志野市実籾2丁目24番1号(実籾本郷公園内)

【写真は市ホームページより引用】



**建物の規模・規格**

かやぶきひらやよせむねづくり  
**茅葺平屋寄棟造**

床面積 315.7㎡

オモヤ 桁行 20.0m 梁間 11.0m  
(廊下・客便所を含まず)

ドマ 桁行 9.4m 梁間 8.2m

棟高さ 10.3m  
(礎石上端から棟木上端まで)

### 利用案内

開館時間 午前9時30分～午後4時30分

休館日 第2・第4月曜日 (祝日にあたる場合はその翌日に振替)  
年未年始 (12月29日～1月4日)

入場料 無料

### 問い合わせ

習志野市教育委員会社会教育課 TEL047-451-1151 (内線462)

実籾本郷公園にある旧鵜田家住宅は平成3年習志野市指定文化財に指定され、この年、所有者の鵜田禮司さんから市に寄付されています。その後、解体され、実籾本郷公園に移築復原され、平成17年には千葉県指定有形文化財の指定を受けています。

この住宅は移築以前はこの近くの東金(御成)街道沿いにあつて、江戸時代、実籾村の名主をつとめた鵜田家の住まいでした。

平成12年10月、ほぼ建築当初の姿で移築復原され、この年11月から一般公開されています。

古民家の中でもかなり大きいこの茅葺の建物は岩手県南部地方に多い曲屋という造り。L字型が特徴で、通常土間は馬屋になっていたといいますが、鵜田家では馬を飼っておらず、土間は穀物などの置き場になっていたとのこと。また、この地方ではあまり見られない曲屋を建てた理由も分からないと鵜田さんはおっしゃっています。

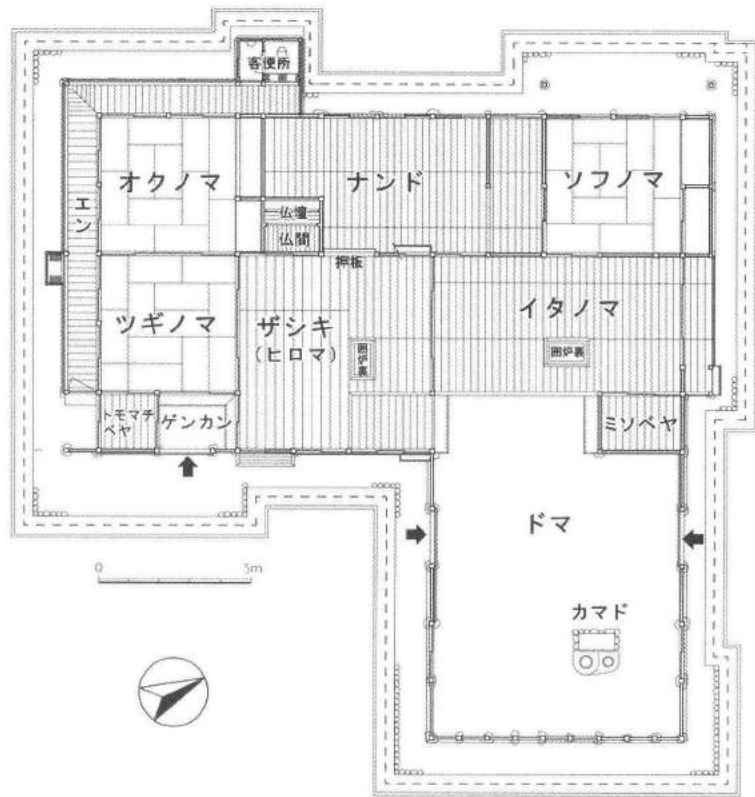
近ごろの住宅ではお目にかからない土間もこの古民家の見どころのひとつ。

広い土間には民具が展示しており、カマドで火を焚いているのも懐かしい風景です。

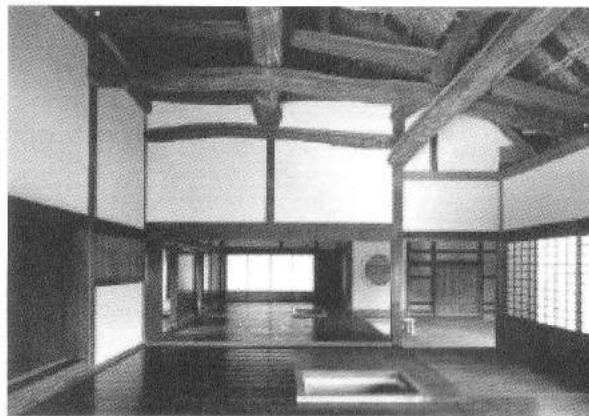
(カマドの火は午前中のみ。天候により焚かない日もあるそうです。)



カマドに燃える火。懐かしい



旧鶴田家住宅の間取り



旧鶴田家住宅は享保12年（1727）から翌13年にかけて建築されました。その移築復原にあたっては、現代の名工、学者棟梁といわれた故田中文男氏も参加しています。

解体移築の際には、「大工手間日記」「大工出面書留板」「襖引手裏板」という貴重な資料もみつかっています。



アクセス

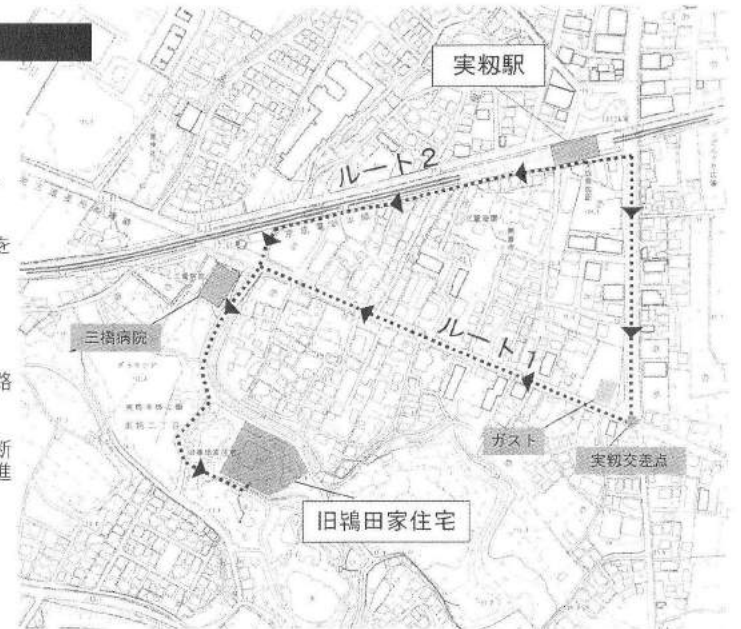
新京成線「新津田沼駅」北口または京成本線「京成大久保駅」からハッピーバス（習志野市コミュニティバス）「京成大久保駅ルート」で「実朮本郷入口」下車徒歩10分

駐車場有（4台）  
実朮本郷公園内にも駐車場があります。



実朮駅からの道順

- ルート1（徒歩約15分）**
- ①実朮駅南口から出て、バス通りを南に進む（320m、約5分）
  - ②実朮の交差点を右折し、東金街道沿いを進む（390m、約6分）
  - ③三橋病院のある交差点を左折する
  - ④しばらく道なりに進む（260m、約4分）
- ルート2（徒歩約8分）**
- ①実朮駅南口を出て、線路沿いに西に進む（300m、約4分）
  - ②東金街道に出たら、横断歩道を渡りそのまま直進する
  - ③しばらく道なりに進む（260m、約4分）



庭のイロハモミジ（11月）



花ショウブ園と旧鶴田家住宅（6月）

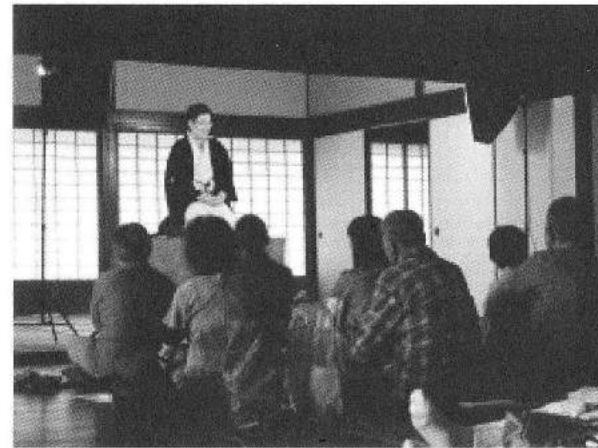
四季折々の  
自然の風景も  
魅力

最新情報は習志野市のHP施設一覧に



## 落語会・お月見の会

開催日時 (予定)  
日 時 令和元年9月13日 (金)  
※中秋の名月です。  
①落語会 午後4時30分〜6時  
②お月見の会 午後6時〜7時15分  
※②のみ雨天または雲間のない場合は中止。  
開催場所 旧鶴田家住宅 (習志野市実籾2・24・1)  
講師 月の家 小圓鏡 氏 他  
定員 落語会のみ事前申込制で40名程度  
(9月2日頃受付開始)



昨年開催された旧鶴田家住宅の落語会  
ことしも開催を予定しています



庭のつくばい (水琴窟)

### すいきんくつ 庭の水琴窟

江戸時代の庭師が考案したといわれる水琴窟。手洗鉢や蹲居(つくばい)の流水を利用し空洞の中に落ちる水音を反響させる装置。この音、あなたはなんと表現しますか。

## みんなが和めるところに：

習志野市実籾の実籾本郷公園内に移築復原されている旧鶴田家住宅。代々住み続けたこの家を市に寄贈した鶴田さんご夫妻をおたずねしました。

文化財になるようなお家にお住いになるということはすてきなことだと思います—

重子さん 夏は涼しくてクーラーがいりませんでした。

市に寄贈なさるきっかけは—

重子さん ずいぶん前にもそういうお話があったのですが、あの家がとても気に入っていた父が「自分が目の黒いうちはダメだ」と言っていたので。その父が亡くなってから寄贈することになりました。

禮司さん あの家を維持するのに一番大変だったのは茅葺屋根です。大きな屋根なので毎年10分の1ずつ、10年かけて葺き替えるのです。だから毎年葺き替えです。カヤが手に入

りにくくなり、印旛、その後旭から来ていた屋根屋さんも次つぎにやめてしまいました。

重子さん カヤを運んできて干し、当日切りそろえて屋根の上まで届けるのに大勢の力が必要でした。私は小さかった子どもたちの世話をしながら食事作りをしました。

あの家では昔、近所の人たちが土間で「縄ない」をしたあと鶏めしを炊いて食べたと聞いています。

いい時代でしたね。これからは…  
禮司さん あの家はみんなが和める場所になってほしい。お茶を飲んだり食事をしたりして—。

ただ見て帰るだけでは親しみがわきません。

文化財として制約はあるでしょうが、この貴重な遺産を活かしてこそその「文教都市」ときは考えます。

鶴田禮司さん 重子さんご夫妻

